

金 融 市 場 動 向

— 平成 6 年 8 月 —

(平成 6 年 9 月 14 日)

1. 短期金融市場

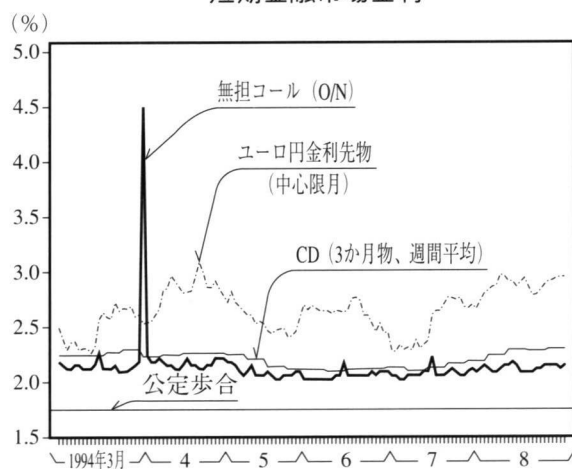
8 月中の無担コール・オーバーナイト物レートは、やや強含んだ。また、CD（譲渡性預金）3 か月物レートは、月初より強含みで推移し、幾分上昇した。一方、ユーロ円金利先物（3 か月物、金利ベース）は、中旬にかけて上昇した後、概ね横這い圏内で推移した。

コール・プロパー手形市場資金平均残高（全国）は40兆2,505億円と前月（41兆9,292億円）比減少した。

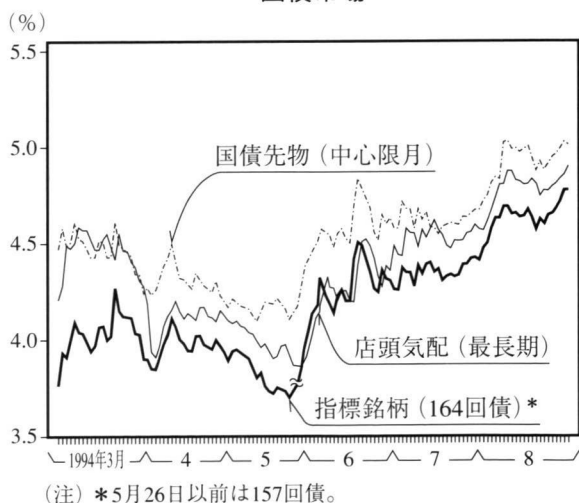
2. 資本市場

8 月の長期国債利回り（164回債）は、前月末に強含んだ地合いを引き継いで月初より上昇し、中旬は幾分落ち着いた動きを示したものの、月末にかけては再び強含み、結局4.775%で越月した（前月末4.425%、国債先物中心限月利回り<9日に94年9月限から12月限に交替>は5.009%<前月末4.672%>で越月）。国債の出来高は、現物（店頭取引）、先物ともに前月を上回った。

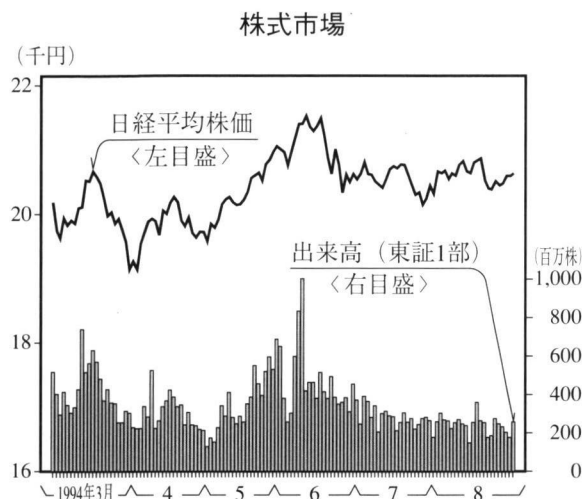
短期金融市場金利



既発債市場利回り
— 国債市場 —



株式市況（日経平均株価）は、模様眺め気分から薄商いの中、小動きの展開となり、結局20,628円で越月した（前月末20,449円）。また、株式出来高（東証1部月中1営業日平均）は2.42億株（速報）と、前月（2.88億株）をさらに下回った。



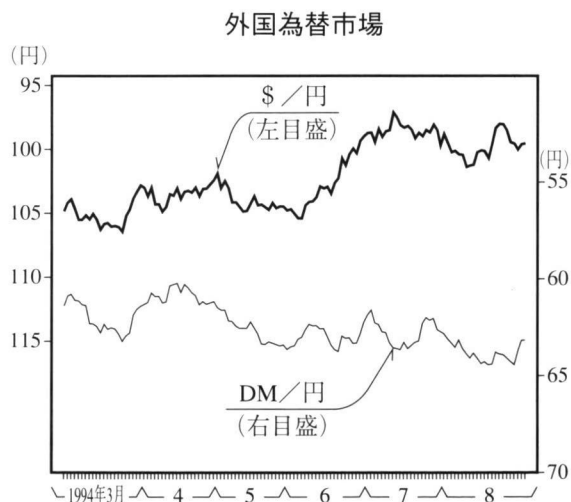
起債動向をみると、長期国債は、10年物（価格競争入札分）については、クーポンレートが前月債比0.2%引き上げられたものの、総じてみれば盛り上がりを欠いた入札となった（8月23日入札分＜9月債＞は募入平均利回り4.632%、応募倍率2.11倍）ほか、6年物についても、クーポンレート（前回債比+0.2%）が市場実勢比低めであったこと等から低調な入札となった（8月3日入札分は募入平均利回り3.960%、応募倍率1.44倍）。また、中期国債は、4年物についてはクーポンレートが前回債比0.6%引き上げられたものの低調な入札となった（8月31日入札分は募入平均利回り4.019%、応募倍率1.50倍）ほか、2年物についても総じてみれば盛り上がりを欠いた入札となった（8月10日入札分は募入平均利回り2.386%、応募倍率1.76倍）。一方、短期

国債は概ね順調な入札となった（8月5日入札分＜6か月物＞は募入平均利回り2.255%、応募倍率2.50倍、8月17日入札分＜3か月物＞は募入平均利回り2.208%、応募倍率2.46倍）。

8月の国内公募普通社債は、2,100億円と前月に引き続き低調な発行となった（7月1,850億円）。一方、国内エクイティ市場での発行（8月払込み分、増資を除く）は、大型起債が目立ち、年初来ピークの発行額となった（7月2,760億円→8月3,280億円）。

3. 外国為替市場

8月の円の対米ドル直物相場（東京市場、終値）をみると、上旬は米国利上げ観測等を背景に101円台まで軟化した。中旬入り後は、6月の米国貿易収支における対日赤字幅の拡大等を材料にザラ場で97円台まで上昇する場面もみられたが、月末にかけては再び弱含みに転じ、結局99.57円で越月した（前月末99.93円）。一方、円の対独マルク相場（東京市場、終値）は、欧州の利下げ打ち止めへの思惑の台頭から中旬にかけ若干軟化した



その後小戻しし、結局63.25円で越月した（前月末62.75円）。

なお、東京外国為替市場の出来高（円対米ドル、直物および先物・スワップ計、1営業日平均）は121.6億ドルと、前月（130.3億ドル）を下回った。

4. 決 済

8月の資金決済の金額（1営業日平均）をみると、手形交換高（東京）は前年同月を下回った（前年比△18.0%）一方、全銀システム取扱高は前年同月並みの水準（前年比+0.1%）となった。この間、外為円決済交換高は前年同月を上回った（前年比+8.1%）。また、国債の決済金額（1営業日平均）については移転登録（前年比△6.2%）、振込口座振替（同△15.7%）ともに前年同月を下回った。



5. 資金需給、金融調節

8月の資金需給をみると、銀行券要因が7,393億円の余剰（前年同月9,216億円の余剰）

となった一方、財政等要因は国債発行等から1兆544億円の不足（同1,436億円の不足）となった。こうしたことから全体では3,151億円の不足（同7,780億円の余剰）となった。

こうした状況下、日本銀行は貸出等により資金を供給した。

9月の資金需給（国債発行織り込み前）を窺うと、銀行券要因が月中7,000億円程度の余剰（前年同月3,375億円の余剰）となる見通しであるほか、財政等要因も、受入面で源泉所得税、法人税を中心とする税揚げや厚生保険料の受け入れが見込まれるものの、支払面で地方交付税の交付金や国債償還等の支払いが嵩むこと^{かさ}から、3兆2,700億円程度の余剰（同2兆5,243億円の余剰）となる見通しであり、この結果、全体では3兆9,700億円程度の資金余剰（同2兆8,618億円の余剰）となるものと予想される。

6. マネーサプライ、銀行券、預金・貸出

7月のM₂+CD平残前年比伸び率は+1.9%と、前月に比べ0.4%ポイント上昇した。通貨種類別にみると、準通貨の伸び率が低下した一方、預金通貨の伸び率が上昇した。また、広義流動性の平残前年比伸び率は+3.3%と前月に比べ0.2%ポイント上昇した。

8月の銀行券平残前年比は+5.0%と、前月（+4.9%）を上回る伸びを示した。

8月中の金融機関の預金・貸出動向をみると、預金平残（実質預金+CD、都銀、地銀、地銀Ⅱ）の前年比は+1.5%と前月比低下した。また、総貸出平残（都銀、長信、信託、地銀、地銀Ⅱ）の前年比は△0.3%と、前月対比0.1%ポイントマイナス幅を縮小した。

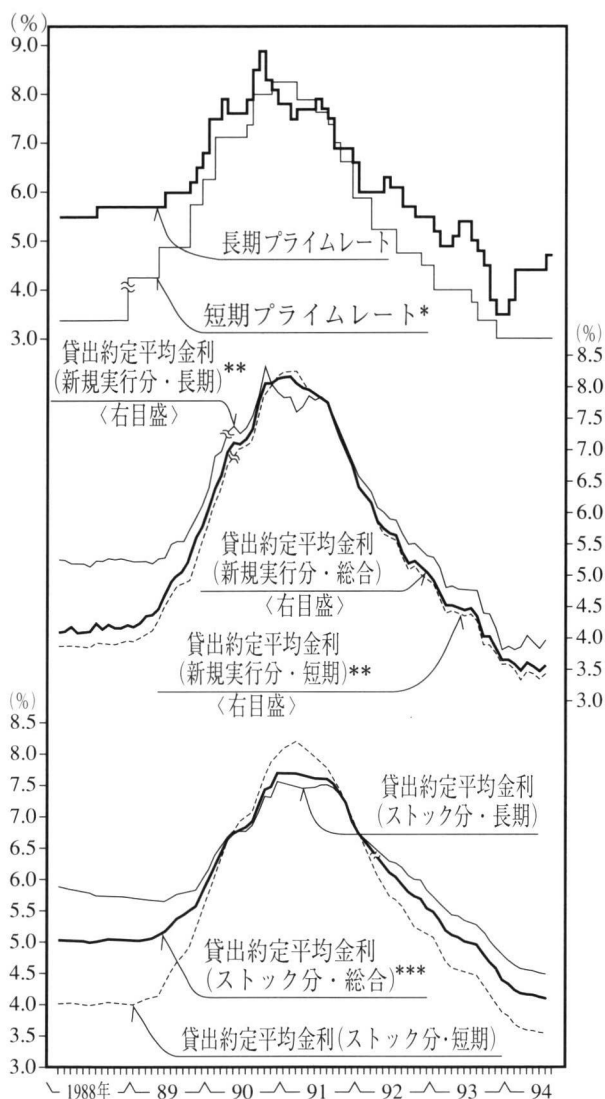
7. 貸出・預金金利

7月中の貸出約定平均金利（全国銀行）をみると、新規実行分については、短期、長期ともに3か月ぶりに上昇したことから（短期：前月比+0.084%、長期：同+0.130%）、総合でも3か月ぶりに上昇した（同+0.091%、総合：6月3.469%→7月3.560%）。

また、ストック分については、短期、長期、当座貸越ともに引き続き低下傾向を持続し（短期：前月比△0.013%、長期：同△0.019%、当座貸越：同△0.027%）、総合では、13か月連続で既往ボトムを更新した（総合：6月4.120%→7月4.098%）。

この間、7月の定期預金金利（自由金利分、3か月以上6か月未満の全銀受入金利平均）は前月比若干上昇した（6月1.961%→7月1.965%）。

貸出金利（全国銀行）



(注) * 1989年1月以降は都市銀行の中で最も多くの銀行が採用した金利。

** 1990年4月以降は地方銀行Ⅱを含む。

*** 1992年4月以降は当座貸越を含む。

(調査統計局)